

## 中国語・日本語の漢字をめぐって

——中国語のなかに移入された外来語としての日本語——

牧 田 英 二

### (1)

中国文を中国音で読むことなく、漢文式に日本語で読む方法は、漢文教育をもちだすまでもなく現在もなお根強いし、文言だけでなく現代文にもこの方法を援用している人は決して珍しいことではない。日本人にとって、漢字を手がかりにして中国語という外国語をまがりなりにも了解するということは、いうまでもなくきわめて有利な点にちがいないが、同じ漢字でも異なる意味をあらわす場合が少なくないので、しばしばとんでもない誤解をまねきがちである。古く入った漢語で、両国で通用するうちに別々の意味に分かれてしまっていたり、意味のずれが生じていたり、新しいことばでも、意味はちがってもたまたま字づらの上では同じという場合等いろんなケースが考えられるが、誤解を生ずる落とし穴は随所にあるといわなければならない。中国語の初学者で意味をとりちがえがちな単語には、例えば、

娘(おふくろ)、老婆(女房)、丈夫(亭主)、汽車(自動車)、洋行(外人商社)、手紙(ちり紙)、野菜(野生の草)、東洋(日本)、料理(処置する)、迷惑(まどわす)、勉強(無理じいする)、告訴(告げる)、走(あるく)、救火(火事を消す)、馬上(ただちに)、多少(いくつ)

などがある。とはいえ、共通単語で意味領域が重なるものが多いのも事実である。

形而上学，亦称玄学。这种思想，无论在中国，在欧洲，在一个很长的历史时间内，是属于唯心论的宇宙观，并在人们的思想中占了统治的地位。在欧洲，资产阶级初期的唯物论，也是形而上学的。由于欧洲许多国家的社会经济情况进到了资本主义高度发展的阶段，生产力，阶级斗争和科学均发展到了历史未有过的水平，工业无产阶级成为历史发展的最伟大的动力，因而产生了马克思主义的唯物辩证法的宇宙观，于是，在资产阶级那里，除了公开的极端露骨的反动的唯心论之外，还出现了庸俗的进化论，出来对抗唯物辩证法。（毛沢東「矛盾論」）

この文のなかには、形而上学，理想，歴史，時間，唯心論，宇宙観，国家，社会，経済，情況，資本主義，生産力，階級，闘争，科学，唯物辯証法，進化論などきわめて多くの日中共通語があるのがわかる。このように現代中国語（とくに書面体の文章）に日本語と意味領域が同一に対応することば，特に近・現代になって外国の新しい概念，事物にあてた訳語のなかに日本語と共通する語彙が多い。これは中国よりも一步先んじてヨーロッパ文明を導入していた日本がヨーロッパの言語を翻訳するさいに用いた訳語が，そのまま「外来語」として中国語のなかに取り入れられたという事情による。

## (2)

ところで，中国語に外来の新しいことばを組み入れる場合，音訳，意訳，音義混合訳の三通りの方法がとられる。基本的に一音一義の漢字で綴られる中国語のなかに，音のみを代表する多音節語が混入することはいかにも不自然さがまぬがれがたく，音訳法による新語は一時盛行しても，他に適当な意識語があれば次第にそれによって淘汰されてゆく傾向が強い。五四時期から30年代にかけて文学者や知識人たちはさかんに，印貼利根追亜（インテリゲンチャ），普羅列塔利亞（プロレタリア），布爾喬亞齊（ブルジョアジー），意德沃羅基（イデオロギー），奥伏赫變（アウヘーベン），生的悶特（センチメンタル）などの音訳語を用いたが，いまでは知識分子，無産

階級、資産階級、意識形態、揚棄、感傷のとそれぞれ意識語に取ってかわられている。ここで現在もよく見かける音訳語を挙げると、

① 咖啡(コーヒー)、白蘭地(ブランディー)、威士忌(ウイスキー)、香檳(シャンペン)、可可(ココア)、沙發(ソファ)、撲克(ポーカー)、高爾夫(ゴルフ)、打(ダース)、加倫(ガロン)、鏟(ポンド)、先令(シリング)、馬克(マルク)、蘆布(ルーブル)

② 冰其冷(アイスクリーム)、烏托邦(ユートピア)、引擎(エンジン)、邏輯(ロジック)、維他命(ビタミン)

③ 卡車(トラック)、吉普車(ジープ)、卡片(カード)、乒乓球(ピンポン)、啤酒(ビール)、拖拉機(トラクター)、芭蕾舞(バレエ)、爵士樂(ジャズ)、霓虹灯(ネオン)、卡賓槍(カービン銃)、沙皇(ツァー)、可蘭經(コーラン)

①は純粹の音訳、②は音訳に意識部分を組み込んだもの、③は音訳のあとに中国語部分を語尾のようにつけ加えたものである。②③の例にみられるように、音訳にあたってもなるべく音訳部分を生かしたいという気持が強いといえよう。現代中国語では日本語とちがって音訳の外来語は多くはないが、外国の国有名詞は漢字による音訳にたよるしかない。

馬克思(マルクス)、列寧(レーニン)、沙士比亞(シェイクスピア)、托爾斯泰(トルストイ)、陀斯妥以夫斯基(ドストエフキー)、加拿大(カナダ)、巴黎(パリ)、伯林(ベルリン)、奧林匹克(オリンピック)、哈佛大学(ハーバード大学)、路透(ロイター)、紐約時報(ニューヨーク・タイムズ)、華盛頓郵報(ワシントン・ポスト)

ただし、プラウダは「真理報」、ユマニテは「人道報」、エコノミストは「經濟学家」と意識している。

次に意識法だが、中国人がはじめて外国の事物に触れたとき、洋船、洋布、洋刀、洋槍(洋式銃)、番茄(トマト)、西菓、西服(洋服)のように洋、番、西を付けてあらわしていたが、これではとても間にあはずがなく、

いる。「(日本に来てから)以前見たこともなかった書物に次々に目に触れ、これまで窮められなかった道理がどんどん明らかとなり、暗室で光を見、空腹に酒を得たようだ」とのべ、さらに「日本語は一年で学べる。日本文は半年でつくられる。日本文を学ぶのは数日で小成し、数カ月で大成する」といつている。当時の日本文は十のうち七八までが漢字、語尾やテニヲハだけが仮名であって、中国人にとっては語を転倒する、つまり漢文よみを逆転倒すればほぼ意味を理解することができるよとされたのである。

さきに挙げた毛沢東の文の冒頭に「形而上学はまた玄学ともいう」とあるが、「玄学」は中国人が直接ヨーロッパ語から訳したことばであり、「形而上学」は日本語から入ったものである。ただし日本人による造語ともいきれない。というのは、易経に「形而上なるもの、これを道という。形而下なるもの、これを器という」という文がみえ、日本人がこれを *Metaphysics* の訳語に採用し、形而上学としたからである。このように、日本人が翻訳にさいし、古代中国語から適当な語彙をさがし、それに新しい意味を付与して訳語にあて、中国に逆輸入されたものがかなりある。

芸術	後漢書	学問と技術、占いの技。
階級	三国志	官位などの順位。
具体	孟子	全体を完全に備える。
経理	史記	常の法によって治める。
表情	白虎通	心情を表わす。
文化	説苑	刑罰を用いないで人民を教化する。
保険	隋書	要害の地にたてこもる。
経済	宋史	国を治め民をすくう。
流行	孟子	ゆきわたる。
思想	曹植詩	おもいやる。
文明	易	文采があらわれる。
文法	史記	法令の成分、法律、規則。
社会	東京夢華録	祭日に郷村住民が集まる。
生産	史記	生活のための仕事。
鉛筆		鉛粉を用いて書く毛筆。
組織		糸を組み機を織る。

原語の意味から、あるいは事物の機能、形態にふさわしい名称をつけ、新語をつくっていった。

自行車(自転車), 火車(汽車), 輪船(汽船), 飛機(飛行機), 火箭(ロケット), 直升機(ヘリコプター), 足球(フットボール), 羽毛球(バドミントン), 水泥(セメント), 鋼琴(ピアノ), 口琴(ハーモニカ), 唱片(レコード), 粉筆(チョーク), 塑料(プラスチック), 水庫(ダム)

### (3)

さきに中国語のなかに、日本人がヨーロッパの言語を翻訳するとき用いた訳語が数多く導入されているとのべたが、それらはほとんど意識語のものであって、日本語経由の音訳語は、倶楽部、瓦斯、淋巴、虎列刺(コレラ)などがあるが、数は少ない。

中国で外国の書籍を本格的に翻訳しはじめたのは清朝の末期、19世紀末から20世紀初めにかけてである。二回にわたるアヘン戦争の敗北と国内の大規模な農民蜂起軍との闘いを通じて清朝の官僚、軍閥は近代的な兵器、軍艦の不足を痛感し、国内に軍需工業と近代的企業、陸海軍の学校をおこした。かれらはまた外国の科学技術導入の必要から、北京、広州に同文館、上海の江南製造局に翻訳館などを設け、翻訳事業に着手した。しかしこの当時の訳文、訳語は現代中国語にはほとんど影響をとどめておらず、決定的な影響を与えることになったのは、日清戦争後、日本に派遣された大勢の清国留学生、知識人による訳書、著書である。

当時日本では、各分野にわたって西洋文明の紹介、翻訳書が大量に出ており、その訳文はみな漢文書き下し式の文体で、訳語には漢語が用いられていた。留日中国人にとって日本で出ていた翻訳書は、直接ヨーロッパの言語によるよりも、てっとり早く新しい思想事物に触れられるものであった。そこでかれらは日本語訳から中国語へ重視するとともに、著述にその訳語を用いるようになった。戊戌変法の失敗後日本に亡命していた梁啓超はその間の事情を「日本文を学ぶ益を論ず」のなかで、次のようにのべて

「文法」は日本来源ではないという説もあるが、これらはみな日本人が中国の古典からヨーロッパ言語の新しい概念、事物に対応させるものとしてその語彙を採用したのであり、古代中国語で持っていた固有の意味とは一応切り離れたうえで再生させたといえよう。いちいち古代語の意味をひきずり、その文脈のなかに近代の新しい概念をもちこもうとすることは事実上不可能である。古代語から訳語を見出す方法は清末の翻訳家嚴復らによっても行われていたが、訳文は文言で、語彙も古典のワクにとらわれるところがあって、とかく難解にわたり、明快、清新さに欠けていた。したがって、比較的平易であった日本語訳の漢語を中国語に借用する方法が優勢となった。玄学は形而上学に、格致学は物理学、天演論は進化論、名学は論理学にそれぞれ取ってかわられていった。

訳語をすべて中国古典の中に求めることはとうてい不可能であり、おのずから限りがある。そこで漢字(ほとんどが二字)を合成することによって新語をつくる方法がとられ、語彙は飛躍的にふえることになった。明治時代、翻訳にあたった人はみな漢学的素養があり、新しい訳語を中国語の語構成のしくみにもとずいて考案していたため、中国人がそのまま中国語の中に導入しても外来語という意識をもつことなく、かなり自然に受け入れられたのである。次にその例を挙げてみる。

現実	意識	主観	客観	概念	觀念	概論	肯定	否定	管理
意志	意図	人格	代表	反動	抽象	反映	反対	対象	理性
目的	動員	哲学	心理	論理	幹部	体操	軍事	政府	議会
議員	投票	財政	主権	主義	独裁	電力	電車	電流	電信
批評	批判	保証	否認	資本	市場	企業	自治	義務	系統
建築	有機	無機	集団	出版	宗教	直接	間接	民族	工業
原子	分子	性能							

そのほか、数学、美学、法学、弁証法、帰納法、方程式、根本的、公開的、世界観、人生観、放射性、原則性、一元論、唯心論など語尾に「学」「法」「式」「的」「観」「性」「論」などをつけるやり方も日本語から中国語

にとり入れられたものである。

ところで、古典に訳語を求めるにしろ、新語をつくるにしろ、はじめ誰が考え出したのかつきとめることはかなり難しい作業であるが、広田栄太郎氏によると、帰納、演繹、論理学、倫理学は西周、主義、社会は福地源一郎(桜痴)、進化論、生存競争は加藤引之、絶対、範疇は井上哲次郎の考案になるものだという。しかしなんでもみな中国語に借用されたわけではなく、前島密がつくったという「為替」「切手」「郵便」は中国語に入っていない。一方中国では明代にすでにマテオ・リッチが「乾坤体義」「幾何原本」「測量法義」等の著書を著して西洋科学の紹介をしており、この時期に用いられた用語、「幾何」「地球」「赤道」「両極」「北極」「熱帯」などはその後ずっと通行しており、日本にも伝えられたのである。

明治時代に日本人が創造したと思われる新語のなかにも、当時日本に先んじて中国でできていたロブシャイドの英華辞典をはじめ各種の辞典にすでにくつかその語がみえていることから、日本人がそれらの辞典から借用したとみられている。

次に、漢字で表記されてはいるが、本来純粋の日本語だとみなされることばも中国語のなかにいくつか見うけられる。

場合 場所 打消 手続 見習 便所 内服 例外 但書 取締  
入口 出口 引渡 借方 味之素

これらのほかに、日本人がある種の意味を表現する必要から新たにつくった漢字とその語義が、中国音をつけて中国語のなかにとり入れられている。

癌、腺、腔、耗、糲、吋、呎、碼、籽、甌、噸

このうち耗、糲、籽はそれぞれ毫米(ミリメートル)、厘米(センチメートル)、公里(キロメートル)となっているが、吋、呎、甌については、吋=英寸(yingcun)、呎=英尺(yingchi)、甌=千瓦(qianwa)として、漢字の一字一音の原則に反して一字を二音節でよむ珍しい例になっている。

### 参考資料

高名凱，劉正燾「現代漢語外来詞研究」1958，文字改革出版社(北京)。

湯森森編「日語外来語辞典」1964，商務印書館(北京)。

さねとう・けいしゅう「中国人日本留学史」(増補版)1970，くろしお出版。

「中国文化叢書」④言語，1967，大修館書店。

大原信一「中国語と英語」(中国語研究学習叢書 14)1973，光生館。